

孫の面倒見たい

「ソフリエ」奮闘

イクメン



北九州市小倉南区の元国家公務員、奥本新一さん(68)が、福岡市に住む長男一家が、孫・楓くん(1歳)の誕生日に遊びにくる。歩き始めた楓くんの手が届きそうな花瓶を移し、投げたら危ないリモコンを隠す……。細かいところを

気が回る奥本さんは「ソフリエ」という称号を取得した。孫の育児をする、ちよっと年をとったイクメンだ。

今年2月、楓くんのもう一人の祖父と一緒に、北九州市が主催したソフリエの認定講座を受けた。助産師らを講師に、子どもが掛かりやすい病気や発達に依っておくる事故の講義、離乳食の試食、風呂入れ体験など、2日間、子育てに必要な知識を学習した。

「子育てはほとんどしませんでした」と奥本さんは笑う。時折、おむつを替えた

り、託児所に迎えにいったりした程度だ。夜泣きする子がうるさくて、妻に「産間にしつかり遊ばせて、夜はよく寝かせて」と文句を言ったこともあった。長男の妻にも、この「夜泣き対策」をアドバイスしたが、間違ったやり方だったと講座で知り、頭をかい

講座を終えた奥本さんは「読み聞かせる絵本一つとっても、自分の時とはずいぶん

変わった。今どきの子育てがわかった」と話す。「長男夫婦にも子育ての方針がある。とやかく口出しをしない方がいい」とも考えるようになった。

ソフリエ資格を考案したのは、子育て環境の改善などに取り組む東京のNPO法人「エガリテテ大手前」だ。代表の古久保俊嗣さんは「高度経済成長期で仕事が多忙で、子育てにかかわれなかった団塊

の世代の男性に、孫育てにかかわりたいと考える人が多いい」という。

独自に調査すると、女性より男性の方が、孫の育児への参加意識が高かった。一方で、女性側から「夫に出来るわけがない。危なっかしい」と孫育てから遠ざけられるという問題も浮かび上がった。

そこで発案したのがソフリエ資格だ。「研修と資格認定で、おじ

いちゃんが自信を持って孫育てに参加できるようにしようと思った」と古久保さん。

「父親が育児をとる方がいいが、ハードルはまだ高い。暇なおじいさんが、きえない趣味に走るんじゃないかと、孫育てに参加するのは簡単なことだ」と話す。自分の孫だけでなく、保育ママのように、近所の子どもを預かる「イクシイ」も狙っているという。

(福井悠介)